

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19520441
 研究課題名（和文） 横浜ピジンのデータベース化とデータベースを用いた簡略日本語表現の研究
 研究課題名（英文） Creating a database of Yokohama pidjin and utilizing the database for researching simplified Japanese expressions
 研究代表者
 Kaiser Stefan
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授
 研究者番号 20260466

研究成果の概要（和文）：幕末・明治期に発生したYokohama Dialectは日本語をベース（主体）としたピジンとして唯一知られている。本研究では当時の文献で見られるYokohama Dialectと判定される語彙・表現のデータベースを作成した。つづいて、データベースのデータを分析し、このピジン語の性格・諸相を明らかにした。方法としては他のピジン語の性格に関する研究結果と対照することをとおしてその性格を明らかにし、ピジン語共通の特徴および日本語ピジン特有の性格を検証した。その結果、従来のピジン語の性格を共通にもちながら、語順など日本語特有の特徴を併せ持っていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The “Yokohama Dialect”, which originated around the 1860s, is the only known example of a Japanese-based pidjin. The first part of this research project consisted of creating a database of words and expressions of this pidjin from contemporary sources. The second part was an examination of the nature of this pidjin, using the data from the database. The analysis documented that this pidjin shares the nature of other pidjins, while at the same time exhibiting Japanese characteristics, such as word-order related phenomena.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：横浜ピジン、データベース化、簡略日本語

1. 研究開始当初の背景

Yokohama Dialectの名称が指している自身は必ずしも一定していない。そもそも国

内外であまり研究されていない現象ではあるが、特に国内では日本語を主体とするピジン語とともに英語をベースとしたピジン

語も生まれたとする主張（亀井秀雄 2000 「一八六〇年代・横浜雑居ことばについて」北大文学部紀要 48-3）や、両方を混合したものが発生したという考え（横浜市史稿・風俗篇、1932）など、研究者によって異なる。

カイザーは当時までいくつかの論考で *Yokohama Dialect* が日本語ベースのピジンであること、その特徴が他のピジンの特徴と基本的に一致していること（「*Yokohama Dialect* —日本語ベースのピジン—」『東京大学国語研究室創立百周年記念国語研究論集』汲古書院、1998）、それが日本語をベースとしたピジンとして唯一知られていること、横浜では他にピジンが発生したことを示す積極的な証拠がないこと（「*Exercises in the Yokohama Dialect* と横浜ダイアレクト」『日本語の研究』第1巻1号、2005）などを明らかにした。ただ、その根拠は主として匿名の小著 *Exercises in the Yokohama Dialect* (1879)、当時の英字新聞、一部の日本語文献によったが、本研究をより確固たるものにするためには当時の日英両言語の文献に含まれている情報を総合的に収集し、研究用のデータベースを作った上で論を進める必要がある（Kaiser, Stefan (2005) “Yokohama dialect, Yokohama kotoba and Kurumaya-eigo: the nature of the pidjin that developed in contact situations after the opening of the port of Yokohama”. *The Third Conference on Japanese Language and Japanese Language Teaching Proceedings of the Conference, Rome, 17-19th March, 2005*. Libreria Editrice Cafoscarina, Venezia で取り上げた幕末明治初期の「車屋英語パンフレット」がその出発点と言える）。

2. 研究の目的

幕末・明治期に発生した *Yokohama Dialect* は日本語をベース（主体）としたピジンとして唯一知られている。このピジン語は簡略日本語が国際コミュニケーションのツールとして使われた実例であり、今後の日本と外国人とのあいだの国際コミュニケーションのあり方には大いに参考となりうるものである。

本研究ではまず当時の文献で見られる *Yokohama Dialect* と判定される語彙・表現のデータベースを作成する。次に、データベースのデータにもとづいて、このピジン語の性格・諸相を明らかにする。方法としては他のピジン語の性格に関する研究結果と対照することをとおしてその性格を明らかにし、ピジン語共通の特徴および日本語ピジン特有の性格を検証する。さらには、

当時の接触現場に発生した簡略な言語の性格やデータから、日本語による国際コミュニケーションのあり方を検証する。なお、*Yokohama Dialect* に関する従来の研究は限られた資料しか扱っていなかったために、資料の性格による偏りが欠点だったといえる。日英両側に立った資料を収集しデータベース化することで、より客観的なデータが得られ、当時のピジン語の総合的な性格や使用範囲の記述が可能になる。

3. 研究の方法

3-1 資料

Yokohama Dialect のデータベース構築するのが一義的な目的である。そのために、*Yokohama Dialect* と判定される語彙・表現のデータベースを作成する。上記1に言及した文献 *Exercises in the Yokohama Dialect* (1879) に加えて、以下の文献に見られる語彙・表現を収集する。

幕末・明治初期の英米人による日本体験記 (*Edition Synapse, Japan in English: Key Nineteenth-Century Sources on Japan (1850-59, First Series), (1869-69, First Series), (1870-79, First Series), (1880-89, First Series)*) の計21冊および『初期日本英学資料集成』（マイクロフィルム、34リール）におさめられている関係資料（特に、単語・会話・文字を扱った日本人による当時の版本など）

それらの文献から *Exercises in the Yokohama Dialect* (1879) とも比較しながら *Yokohama Dialect* と思われる語彙・表現を抽出し、データベースを作成する（英語と対訳があるばあい、その対訳も含める）。

3-2 *Yokohama Dialect* の性格の分析

単語・表現のデータベースのデータにもとづいて、このピジン語の性格・諸相を明らかにする。方法としては他のピジン語の性格に関する研究結果と対照することをとおしてその性格を明らかにし、ピジン語共通の特徴および日本語ピジン特有の性格を検証する。その際、ピジン語について先行研究で指摘されている以下の特徴をチェック項目にする（詳しくは研究計画・方法参照）

Yokohama Dialect のデータベースを使って、この日本語ベースのピジン（Daniels 1948の推定では、85%が日本語語彙・表現であるという）の分析を行う。分析対象の項目はピジン語の先行研究（Todd 1990, 1994, Muehlhausler 1986,

Sebba 1997など)を参考に以下のようなものを設定する。

3-2-1 音声的に単純である:ピジン是一般に音声的に簡略化する(音声は特に Exercises in the Yokohama Dialect のローマ字表記法により分析可能である(例えば、high yackoo (百)、worry (悪い)、sammy (寒い)などの具合に)。

3-2-2 語彙数が少なく、主として社会的優勢のグループからとられる

Exercises in the Yokohama Dialect とその他の資料を校合することによって明らかにする。また日本語の語彙かどうかの判定については Daniels 1948 などの先行研究を参照する。

3-2-3 語彙の大半が多義である

これは Exercises in the Yokohama Dialect における英訳とピジン語彙と対照することにより(例えば、To have: Arimas, To obtain: Arimas, To arrive: Arimas)

3-2-4 語彙の大半が多機能(多品詞)である

3-2-5 強調は多くは反復による

3-2-6 前置詞は少ないこと(→日本語の場合は、後置詞)

3-2-7 抽象的内容はよく熟語で表現される

3-2-8 語順は固定している

3-2-9 活用はないか、少ない

3-2-10 テンス・アスペクトはコンテキスト、または付属詞・補助動詞で表される

3-2-11 否定は一般に動詞に否定詞を前置して表される(→日本語の場合は、後置して)

3-2-12 上記のもの以外の特徴

3-3 国際的コミュニケーション・ツールとしての簡略日本語の検証

当時の接触現場に発生した簡略な言語の性格やデータから、日本語による国際コミュニケーションのあり方を検証する。

4. 研究成果

上記の項目に従って現在のところ判明した特徴の一部を以下に掲載する。

4-1 項目の分析例

4-1-1 音声的に単純である

元の日本語より単純化された例として、以下のものなどをあげることができる。左が日本語の原音、→の右が単純化された音である(例が多いものについては、数例を上げた後に・・・で省略を示す。なお、「:」は長母音を示している。

4-1-1-1 単音→長音

coots (靴)、eemo(芋)、mar key (薪)、obee (帯)、oh char (お茶)、ooshee (牛)・・・

4-1-1-2 C+/ ui/→C+/i:/

atsie (暑い)、sammy (寒い)、worry (悪い)

4-1-1-3 V+/tsu/ → V:+/ts/

bates (別)、tates (鉄)、yotes (四つ)、it suits (五つ)

4-1-1-4 有声音→無声音

cassie (風)

4-1-1-5 促音→直音(長音)

coachy (こっち)、meats (三つ)、moots (六つ)、yachts (八つ)、yotes (四つ)

4-1-1-6 撥音→直音

donnysan (旦那さん)

4-1-1-7 拗音→非拗音

high yackoo (百)

4-1-1-8 /r/ →/l/

dalley (誰)、eel oh (色)

4-1-1-9 /fu/ →/s/

stats (二つ)

4-1-1-10 /sh/ →/s/

sto (人)、stoats (一つ)

4-1-1-11 /shi/ →/si/

sin turkey (洗濯)、sinjoe (進上)、sitchi (七)

4-1-2 語彙数が少なく、主として社会的に優勢のグループからとられる(計算予定であるが、そのためには、Daniels 1948を参照しながら、語彙の由来を特定する必要がある。今後の課題としたい。)

4-1-3 語彙の大半が多義である

データベースのデータでは、以下の語彙が複数訳をあたえられている(AからIまでの場合を以下に例示。スラッシュはスペリングのバリエーションを区別;括弧内は意味の数)。

Abnai/ah booneye (2)

Aboorah (5)

Acheera sto (3)

Aligatou's/allegato (2)

Arimasu (10)

Arimasen (2)

Baca/bacca (2)

Coots (2)

Die job (3)

Hanash (3)

Hebachi/heebatchey/shebatchey (2)

Itsebu/itzabous (2)

4-1-4 語彙の大半が多機能(多品詞)である

大半まではいかないが、以下のような例がある。

Clean shirt(きれいなシャツ):Atarashee shiroy(新しい白い)。

These colors are too plain, have you none in variegated colors? (これらの色は地味すぎる、変化のある色はないか) :

Kuroy, shiroy, ah kye arimasen? (黒い、白い、赤いありません?)

形はいずれも「白い」で形容詞だが、最初の例では名詞、あとの例では色をさしている。

Is the horse a fast one? (馬は、速いか) :

Mar jiggy-jig arimasu? (馬、直々あります?)

Hurry! Be quick! (急げ!) : Jiggy-jig.

Where is the nearest lighthouse? (最寄りの灯台はどこ?) :

Jiggy jiggy fooney high kin serampan nai rosokoo doko?(直々船拝見サランパンない蠟燭どこ?)

最初の「直々」は形容詞だが、次の例では動詞、そして最後の例では形容詞の最上

級として使われている。

4-1-5 強調は多くは反復による

chobber chobber (ちゃぶちゃぶ) ,
drunky-drunky (酔っている)、high high (はやい) , jig-jig (直?)、maro maro/morrow- morrow (まわる) , minner minner (みんな) 、para-para (似る) , pompom (ハンマーを使う) , sick-sick (病気) , so so (縫う)が例となるが、chobber chobber のように中語語のピジンと思われるものや、high highのように日本語が発音しにくいために反復となったもの、あるいは日本語のオノマトペと思われるものなどがあり、必ずしも強調とは限らないが、反復という形式はかなり使われている。

4-1-6 前置詞は少ないこと(→日本語の場合は、後置詞)

I (私) = Watarkshee (私)

Mine or ours (私の・私たちの) =

Watarkshee

My horse (私の馬) = Watarkshee mar (私馬)

Our boat (私たちのボート) = Watarkshee boto (私ボート)

日本語の文献の例をあげると、以下のようなやりとりが見える(幕末ごろの『横浜繁昌記』)。

(洋客) コノ カレイ ヒトツ。テンポウイクツ。

(商人) ワタクシ マコト。ニッポン イチブ フタツ。

助詞など、ことごとく省略されている。

4-1-7 抽象的内容はよく熟語で表現される

スリッパがcheese eye coots (小さい靴)、ピストルがcheese eye serampan (小さいセランパン)、銀行家がdora donnyson (ドル旦那さん)、灯台がfooney high kin serampan nigh rosokoo (船拝見セランパンない蠟燭)など多くの例がみえるが、基本語の組み合わせでより抽象的な内容を表している。なお、「セランパン」はマレー語といわれているが、「壊す」な

どの意味で使われている。

4-1-8 語順は固定している

「船長はどこ」が Num wun sindoe doko? (ナムワン船頭どこ)で、「長い船が見える」が Nang eye boto high kin arimasu (長いボート拝見あります)と表現されている。「拝見」は常に身分などの関係なく「みる」「みえる」意味で使われている。また、「あります」が「です」なども代用しているので、二つ目の例は「長いボートを見る・が見える」ことを表しているの、基本語順は固定しており、日本語の順にかなっている。

ただ、文法そのものが簡略化されているため、間接命令文など構造が複雑になると通常の日本語語順から部分的ずれる事はある。例えば、「仕立て屋に明日くるように話してくれ、そうしたら仕事がたくさんある」という内容をこう表現している：
Start here hanash meonitchi maro maro tacksan so so arimas (仕立て屋話し明日まるまるたくさんソウソウあります)。つまり、「仕立て屋に話し(てくれ)、あしたくる(まるまる)ように、たくさん仕事(ソウソウ、縫い物)あります」という場合に、部分部分が日本語の語順にかなっているが、構文が単純化されているため、全体として破格になっている。

4-1-9 活用はないか、少ない

上記4-1-8の最後の間接命令の例もそうであるが、例えば条件法の表し方も並列だけで洗われている。

(誰か私のことを尋ねたら、ボートで湾を走ってくると言え) : Nanny sto hanash, watarkshee boto piggy (何ひと話し、私ボートペけ)。

多少例外もあるが、命令形も動詞のます形で表される : (Open the door (ドアを開けろ) : Toe akemasu (戸あけます) . Roast the fowls (鳥を焼けろ) : Tory yakemas. (鳥焼けます) Saddle the horse. : (馬に鞍を置け) Mar koorah sinjoe arimas. (馬鞍進上あります)、など。

4-1-10 テンス・アスペクトはコンテキスト、または付属詞・補助動詞で表される

Yokohama Dialectでは、常にコンテキストで表される。

He has gone out. (彼はだけた) : Piggy

arimas (ペケあります) .

I will give you two boos (二分をあげよう) : Knee boos arimas (二分あります) .

It was a horse. (馬だった) : Mar arimas (馬あります) .

4-1-11 否定は一般に動詞に否定詞を前置して表される (→日本語の場合は、後置して)

Yokohama Dialectの場合、否定詞が後置されることになるが、「否定詞」として使われるのはnighまたは arimasen :

Does his color change in the various seasons? (季節によって色が変わったりするか) : Atsie sammy eel oh piggy nigh? (暑い寒い色ペケない?)、It is not much (たくさんではない) : Tack san arimasen (たくさんありません) 。

4-1-12 上記のもの以外の特徴

ピジンは通常話す言語で、各言語ではない。しかし、現在確認できるYokohama Dialectの姿はもちろん文字に頼らないと確認できない。

Japan in Englishで確認できるYokohama Dialectは幅が広く、正確な日本語に近い表現からYokohama Dialectらしいものまである。前者としては、Danna-san, jinriki-sha ikimasu kaなどがあり、後者としてあげられるのは、Doko maro maro? や Ijinsan anata taisan peggy!やboom boom funis (軍艦) など。しかし、Japan in EnglishとExercises in the Yokohama Dialect (1879) に現れるYokohama Dialectの一番顕著な違いはその書き留め方に認められる。つまり、前者ではおおむねへボン式ローマ字を使っているのに対し、後者では全く違う、独自のローマ字の使い方が見られる。

今までの例でも見られる現象だが、以下いくつか典型的な例をあげる。

Five It suits (それは似合う)
Nine Cocoanuts (ココナッツ)
Ten Toe (足指)
What Nanny (乳母)
Bad Worry (心配)

Hot water Oh you (ああ、おまえか)

以上の例は日本語の語彙を英語の語彙に置き換えている。意味はまったく無関係であるが、発音が反映されている。ただ、こ

れも英語話者に発音しやすいようにアレンジされている（上記4-1の1参照）。もちろん、当時の実際の彼らの発音をまねた可能性が強い。

上記のように英語の語彙に置き換えるのに成功した例がかなりあるが、それができないケースも当然出てくる。そうした場合にどうしたかという、英語の綴りや発音として実存はしないが、アルファベットや音の連続としてあってもおかしくないものに仕立て直している。もちろん、一部英語の実存の語彙や固有名詞を含むものもある。

Clean Kireen

Beef Ooshee

Clothes Kimmono

Coolie Nin soaker

Auctioneer Selly shto

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Kaiser Stefan

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：20260466